

平成29年度(2017年度)宝塚市きずなづくり推進事業結果評価表

No.	申込団体名	確定額 (円)	自己評価		評価	
			事業内容	効果	関係課意見	審査会意見
1	宝塚市民生児童委員連合会	50,000	<p>(1)災害時要援護者リストの作成に協力 (平成29年11月から平成30年3月まで) 宝塚市が実施する災害時要援護者支援制度に避難支援組織として手を上げ、全民生委員278名が協力全市的な調査に協力した。今後、更新にも協力する。 また、その情報を民生児童委員の「福祉票」に転記し、日常の見守り活動につなげた。 (2)災害時民生児童委員行動マニュアルの整備(平成30年3月作成) 災害時の行動マニュアルを整備し、大災害に備えた活動を行った。順次更新する。</p>	<p>(1)災害時要援護者を直接訪問することにより、地域の要援護者の実情を把握し、今後の見守り活動につなげることができた。 (2)いざれ起こるであろう大災害への備えとして、民生児童委員がどのように行動すべきかのマニュアルを独自の視点で整備したことにより、将来への一助となった。 (3)避難支援組織として手を挙げたことにより、これまで一部地域のみ実施されていた、災害時要援護者リストの作成を全市的に整備することに協力できた。 (4)地域の自治会やまちづくり協議会との連携を図る中で、地域全体での見守りの輪を広げることができた。地域支援者を募ることが今後の課題である。</p>	<p>(地域福祉課) 宝塚市民生児童委員連合会が、災害時要援護者支援制度の避難支援組織として届出をされました。要援護者に対して個別訪問され要援護者リストの作成にご協力いただき全市的な取り組みになりました。また、7地区それぞれの災害時民生児童委員行動マニュアルを作成され、安心・安全な地域づくりが進展しました。行政だけでは、取り組めない業務に取り組んでいただいています。今後も、見守り活動や、支援などの継続的な取り組みとともに、地域支援者の確保についても、当該団体と協働で取り組んでいきたいと考えています。</p>	<p>災害時要援護者を支援する制度として組織を挙げて取り組まれ、周知・徹底するベースを構築されたことを高く評価します。今後も本事業の取り組みを継続し、地域での日常のつながりづくり、見守り・支え合いの活動が広がることを期待します。</p>
2	RUNRUNバスを守る会	35,000	<p>①RUNRUNバスを守る会 定例会議 開催日 5/7、6/17、7/16、8/19、9/18、11/5、12/16、1/27、2/24 計9回 場 所 月見山台自治会館、12月のみ男女共同参画センター 出席者 守る会委員(6名)、自治会代表(5名)、みなと観光(株)(4名)、市道路政策課職員(3名) 概 要 月乗降者報告と分析、利用者増加への取り組み方策や課題解決議論など</p> <p>②広報活動 バス通信の発行 2か月に1回 活動報告やイベント告知など利用増進に向けてのPR活動</p> <p>③PRイベントの実施 ・7月に第一小学校の夏まつりに参加し、運行しているバスの展示や活動内容のパネルを掲示。 ・11月に宝塚夢劇場にてランランバスの広告ビラ配りを実施。</p>	<p>定例会議にて各自治体から情報収集(地元の声)できたことで、29年度はバス運行ルートとダイヤ改定を実施。9月の地域住民説明会では「バスの継続運航のためには」といった内容を説明、積極的な意見が出るなど、バスに対する意識が高まった。 第一小学校の夏まつりでは、実際の車両を用意し、子供たちに体験の場として、バスの運転席に乗ってもらい、親にはこのバスが走るまでの思いや必要性をパネルにて説明。11月には2日間、六甲縦断のゴール地点で、「六甲に上るにもこのバスは便利」などのチラシを配布、本活動に対する理解とバス利用促進の重要性(危機感)について多くの方に理解していただいた。</p>	<p>(道路政策課) 当該補助金の交付により、地域が主体となって地区紹介や、登山客へのバス利用案内のチラシを作成するなど、バスの利用促進に関する具体的な動きが活発化した。また、RUNRUNバス定例会議において、利便性、採算性を高めるためのバスルート、ダイヤについての議論が活発化し、その成果として平成30年4月にダイヤ改正を実施し、収支改善に繋がった。</p>	<p>地域住民のバス利用促進に向けた様々な案内の工夫につなげたことを評価します。継続したバスの運行となるよう、行政とも協働して取り組まれることを期待します。今後は、平成29年度の運行ルートとダイヤ改定の実施による乗車数などの効果を十分検証し、今後の最適なバス運行を考えていくためのデータの蓄積に努めてください。</p>
3	FM宝塚835倶楽部	200,000	<p>平成29年度は第1回予選を6月25日、第2回予選10月8日、決勝12月10日に開催。会場は逆瀬川アピアホールで、各回の出場者は81人、101人、105人、観客数は239人、213人、270人でした。 審査員には河内厚郎(文化プロデューサー)、太田哲則(FM宝塚パーソナリティ)、須山公美子(宝塚シャンソン化計画代表)、吉永真悟(音楽プロデューサー)、イッセイKAWABATA(ボイストレーナー)、斉田才(音楽評論家)、松本景(ヴォーカル・ピアニスト/ソングライター)をお迎えしました。</p>	<p>今年度は、自社ホームページに募集フォームを作成したことにより、若い年齢層の参加者が増えました。また、昨年度に新設したアニメソング部門では、コスプレなどの衣装で華やかな舞台が展開されました。それにより、家族3世代で楽しめる観客もいらっしゃいました。 宝塚と関係が深いシャンソンの部門も、ピアノの生演奏に合わせて歌唱できることが好評で、今年も大勢の方にエントリーしていただきました。 今年度は、第5回記念大会として、グランプリや各部門の最優秀賞には、表彰状の他、会場となっているアピアさかせがわのお買い物券、宝塚のお米(30kg、5kg)、宝塚市内の宿泊券やお食事券、お買い物券などを提供して地域の活性化にも寄与しました。 出場者は、宝塚市内からのエントリーが一番多いのですが、他府県からの応募も増えています。これは、大会の存在が広く知られてきたことと、レベルが上がリ、他府県からでも挑戦しようとする方が増えてきたことによると思われます。今後も、より多くの方に挑戦していただき、宝塚らしい歌謡選手権に育てあげて、出場者はもちろん、観客の方にも足を運んでいただけるよう工夫して参ります。</p>	<p>(文化政策課) ホームページからの応募募集や2年目となるアニメソング部門の実施により、若者から3世代での参加者まで、幅広い年代の方が募る事業となった点は評価します。 また宝塚と関係の深いシャンソン部門の継続や、当日の模様をラジオ放送やJCOMオンデマンドで放送するなど、音楽を通じて宝塚をPRする良い機会となっています。ただ出場者数が昨年に比べ減少している点を懸念します。今後も広く参加者を募り、音楽による宝塚の活性化に期待します。</p>	<p>時代のニーズ・流行に即したテーマ部門を設定し、常に「新鮮さ・新しさ」を取り入れられ、昨年度より年代層が広がったことや、市民の参加が増えたことを評価します。今後もよりきずなづくり推進事業補助金の趣旨に合致した取り組みとなるよう努めてください。</p>

No.	申込団体名	確定額 (円)	自己評価		評価	
			事業内容	効果	関係課意見	審査会意見
4	一般社団法人 宝塚青年会議所	300,000	<p>実施時期 2017年7月28日～29日 場所 兵庫県宍粟市 音水湖カヌークラブ 回数 1回 参加人員 宝塚市内中学生19名</p> <p>内容 カヌー体験:個人での挑戦による気楽さと寂しさを体験 スーパーサップ体験:グループで一体になることを実感してもらう シャワークライミング体験:個人での挑戦をすること、仲間をサポートすることを体験 いかに作り体験:グループでの意見交換と、一緒に行う楽しさを実感してもらう</p> <p>仲間と共に挑戦することで、集団の中での役割を果たす・共に励まし合い達成への意欲が生まれる・仲間と一緒にだからこそ成長できるなどの気づきを得ていただくこと、仲間を助け助けられる経験から、思いやり、感謝の心を感じていただくことを目的とし開催しました。</p>	<p>個人と集団を味わうことで集団でのコミュニケーションをとる難しさを実感していただけだと思います。グループによっては、納得のいく結果にならなかった部分もあったかもしれませんが、今後子供たちがいろいろな場面でこのセミナーの成果を発揮していただくと信じています。</p> <p>初めのカヌーでは一人一人での挑戦でした。はじめは不安を抱えている子供もいましたが、徐々になれ、楽しめるようになっていました。しかし、長い間ひとりでカヌーを漕ぐと疲れが出てきていました。変わってくれる人がいない中、必死で最後まで全員が漕ぐことができました。</p> <p>スーパーサップでは、意見の食い違いや意見があってもなかなか言い出せない子供がいました。自分の意見を言うには勇気と自信がいます。チームのなかで自信がある子供の意見が通っていたように思われます。</p> <p>夜には振り返りを行いました。その中でうまく自分をだせなかったなどの反省ができてきました。また、ほかの人の意見を聞くことができなかったなど、チームとしてどのようにするべきか判断の工夫を話し合っていることがおおく見受けられました。</p> <p>二日目はシャワークライミングをおこないました。集団で動いてはいますが、基本的に一人で川を登っていくのがシャワークライミングです。所々一人では絶対に行けない場所などは周りが助け合いをすることの大切さをまなびました。</p> <p>最後は、いかに作りです。どの意見を採用するかが勝負の行方を左右するのがこのいかにづくりの醍醐味です。意見がわかれたり、意見をいえなかったりするとその時点で沈んでしまう危険性があります。今まで意見を言わなかった子供が意見を言うという場面もあり活発な意見交換ができるようになりました。結果、どのようにしたらすまないのかなど論理的に理解しながら作ったいかにが最後まで一番でゴールすることができました。</p>	<p>(学校教育課) 日常生活から離れた大自然の中において、学校以外の集団で、日常では経験することのない環境における集団行動や野外活動を体験することは、人と人とのつながりの大切さ、自分や他人の命の大切さを学ぶ機会として意義あるものと考えます。この体験を通して、中学生自身が地域の中で他人と協力し、自分にどのような役割ができるかを考え行動し、元気で生き生きしたまちづくりに貢献できるような活動を今後も期待します。</p>	<p>毎年1泊2日の短期ながら、綿密かつ充実したスケジュールを計画し実施されていることを評価します。参加した生徒たちが、自然のもとで集団活動や交流を行うことで、「助け合い」、「思いやり」、「感謝」を実体験することは非常に意義深いと考えます。今後は、活動の広がりに向けて事業の体験による苦勞話などを報告する機会を持つことに期待します。</p>
5	宝塚保養キャンプ実行委員会	200,000	<p>2017年6月24日(土) 13時～16時 宝塚保養キャンプ防災学習会 会場 宝塚市立西公民館 講師・森松明希子(福島県郡山市からの避難者) 参加者12名(内宝塚市民9名) 2017年7月30日(日) 13時～ 宝塚保養キャンプ・ボランティア説明会 会場 カトリック宝塚黙想の家 参加者23名(内宝塚市民15名) 2017年8月12日(土)～18日(金) 第12回・宝塚保養キャンプ(6泊7日) 場所 8・12～16カトリック宝塚黙想の家(宝塚市) 8・16～18高野山・南山寮(和歌山県) 参加者:福島県などからの子ども11名 ボランティア:83名(内宝塚市民65名) 内容:8月12日～16日 黙想の家に宿泊 宝塚市民プール 調理実習 自然散策 等 8月15日(月) 防災交流会 会場:米谷自治会館 講師:関西大学KUMC・防災教育班 本防災交流会には米谷小学校区にチラシを配布して広く宝塚市民の参加を呼びかけた。 (参加者26名、内宝塚市民10名) 8月16日～18日 高野山・南山寮に宿泊して金剛峰寺や奥の院散策など 2017年9月18日(日)午前10時～12時 宝塚保養キャンプ反省会 会場:宝塚黙想の家 参加者12名(内宝塚市民10名)</p>	<p>本事業を行うことにより、2011年福島原発事故により高放射線状況が続く福島県をはじめとする地域の子どもたち宝塚に招いて、心と体の保養を行い、放射能からの被害を軽減することができた。</p> <p>また、宝塚保養キャンプの場を活用して、広く宝塚市民に呼びかけて、関西大学のKUMC・防災学習班を講師に防災学習を行った。宝塚市民の防災意識を高めることができた。米谷自治会長は、関西大学KUMCの防災学習に感動し、自治会で防災学習会をやりたいと申し出た。</p> <p>さらに、保養キャンプの参加者とボランティアとして宝塚市民が交流し、また宝塚市内の市民プールなど各施設をキャンプ参加者が訪れて交流をもつことにより宝塚市民との友好親善の絆を深めることができた。</p>	<p>(学校教育課) 福島原子力発電所の事故で避難した子どもと家族が、高放射線状況から離れた宝塚で、思いきり体を動かすことは、避難者の心と体を保養して健康を守るために意義あるものと考えます。また、防災学習を通して、地域との交流を図ることで、市民の防災意識も高めることができます。さらに、地域で協力し合う体制づくりが広がることを期待します。</p>	<p>被災地域の子どもと宝塚市の子どもとの交流により、お互いの心のふれ合いが行える事業であったことを評価します。被災者の方々との交流を通じて得た被災地の現状や被災者の思いなど、貴重な体験を広く市民に伝え、復興支援や偏見の解消につながる取り組みとなることを期待します。</p>

No.	申込団体名	確定額 (円)	自己評価		評価	
			事業内容	効果	関係課意見	審査会意見
6	宝塚アートプロジェクト	500,000	<p>2017・4/8 実行委員会立ち上げ 5/6 実行委員会(南口会館)→*事業終了までに同会場で6回開催(参加説明会以外は各回約10名参加) 6/11・7/13 2回にわたる参加アーティスト説明会(南口会館および展示会場下見)各約30名 10/26～11/2 参加アーティスト作品搬入開始 (ガーデンフィールズ跡地32名、アパート17名) 10/28 ギャラリー来迎搬入4名 11/2 宝塚文化創造館作品搬入6名 宝塚現代美術てん・てん2017開催:11月3日(祝・金)→12日(日) (宝塚音楽学校旧校舎・ガーデンフィールズ跡地・友金アパート・店)53名期間中約2500名の鑑賞者を動員した。 11/3 トークショー・田口幹也×坂上義太郎(宝塚文化創造館)約60名、酒井エル×竹中洋平パフォーマンス約60名 11/7 宝塚文化創造館作品搬出(6名) 11/11 ワークショップ(花のみち桜橋公園)50名 11/12 ギャラリー来迎搬出(4名) 11/13～19作品搬出(宝塚音楽学校旧校舎を除く会場)(49名) 3/26 反省会事業終了</p>	<p>事業名の「てん・てん」が示すものは、場所であり人を意味する。それらを繋いでアートの可能性を見出すのが本事業の基本コンセプトである。従来のホワイトキューブ(ギャラリー等展示のために用意された空間)を飛び出し、まちそのものが展示空間となる。それぞれの展示場所は、建物の佇まい、人々の生活の残像、地域の歴史など場のもつ力を強く感じさせる空間である。そこにアーティストの感性を介在させることで、より魅力ある空間を創成させ、鑑賞者はアート作品をとおして街や場の持つ魅力を再発見することができるのではないかと。そのことは、地域を知るとともに、人々の心に豊かさをもたらし、文化を育むことに繋がる。10日間の会期で約2500名の来場者があった。本事業も回を重ねること知名度を得て遠方地からの来場者もあった。また、今回初となる本事業の記録集を作ることができたのも大きな成果であった。</p>	<p>(文化政策課) 市内の複数展示場所にアートを点在させ、期間中地域一帯がアートを楽しむことのできる空間になったことは、文化芸術の薫り高いまちを目指す本市にとって評価できます。アーティストだけでなく、市内小学校や中高部美術部にも作品出品してもらったり、子ども向けワークショップを開催することで、幅広い年代の来場者を獲得することができたと考えられます。</p>	<p>「芸術・アートのまち」としての宝塚をアピールするうえで、非常に興味深いプロジェクトを実施されたことを評価します。また多くの来場者があったことから、市民や市外の方々からの高い関心があったと考えます。今後は、市民や小中高生との交流・イベント等の開催などによる継続した取り組みとなることを期待します。</p>
7	宝塚フラワー&コンサート実行委員会	30,000	<p>「花作りワークショップ」～花作りでコンサートのお手伝い～ 第1回:2017年9月2日、午後2時より「まどか園」にて。参加30名。(園の入所者と園の職員10名、自治会スタッフ10名、ほっとひろばの地域の子供7名、指導スタッフ3名) 第2回:2017年9月9日、午前10時より「あおぞらげきじょう」(公)宝塚市文化財団主催イベントにて。参加、約子供30名大人30名。 第3回:2017年11月4日、午後2時より「まどか園」にて。第1回と同様。 第4回:2017年11月11日、午前10時より「あおぞらげきじょう」、第2回と同様。 第5回:2017年12月26日、午後2時より、宝塚市「ファータ倶楽部」にて。参加子供2人、大人4人。 参加料金:無料</p> <p>「フラワーバレンタインコンサートin宝塚 VOL.5」 2018年2月10日土曜日、午後2時開演 宝塚ソリオホールにて 入場料 大人前売り 2,500円 (当日3000円) 子供・学生 前売り1,000円(当日1500円) 入場者数:240名 出演者:26名 スタッフ:15名</p>	<p>・花を贈る習慣を広めることにより、宝塚の地場産業「植木園芸、花」業の経済的活性化を期待。 ・「花と音楽のまち」宝塚で、花と音楽のコラボレーションを美しいクラシックコンサートを開催して市民に楽しんでいただくことができた。花を贈る日常を人々に広め、愛する人に花を贈り気持ちを伝えるきっかけとして、バレンタインデーは絶好の日。～みんな誰かを想ってる～というサブタイトルのように、思いを打ち明けるコンサートを展開した。 ・コンサート第一部で歌われたハートフルな曲は村上信夫氏の詩による3曲もあり、思いやりと感謝を歌い好評を得た(アンケートによる来場者の声より)。 ・音楽芝居「花屋のすみれが恋をした」は、様々な恋模様を楽しくつないで、楽器、歌、ダンス、合唱、子役の芝居、などの多くの出演者により、見どころは多く来場者から「楽しかった」との多くの好評の感想をもらうことができた(アンケート結果より)。 ・花業界の「フラワーバレンタイン推進キャンペーン」もあり、薔薇園植物場様のご協力により、ご来場の皆様に花のプレゼントをご用意いただけました。このミニブーケはコンサートの記念に各家庭で美しく咲き、大変喜ばれた。 ・第5回になる今回のコンサートは中川智子宝塚市長のご出席をいただき、この事業に理解と応援をおくっていただき、「花いっぱい」の宝塚らしく盛会になった。 ・5回の「花作りワークショップ」を各地で実施することにより、市民にコンサートへのご理解を広め、子供たちにも「花を贈る習慣」に気づいてもらうことができた。ペーパーフラワーを家族や親子で作ったり、また、地域のボランティアさんの指導で、お年寄りや子供が一緒になって作ったりは、明るい花の持つ力で、笑顔があふれた市民のきずなづくりを達成できた。 ・市民の皆様にも、あわただしい日常から離れ、花を慈しみ音楽を楽しむことによって、心の安らぎと、平和を思う心をはぐくむことができた。 ・通常のコンサートにはない、芝居仕立ての演出は演奏者にとっても、ジャンルを越えて、有意義な交流を深めることができた。</p>	<p>(文化政策課) 花と音楽を組み合わせたコンサートで、市民にクラシック音楽に触れてもらうと共に、事前のワークショップで子どもたちが当日舞台上で用いる飾りの作成を体験し、配布された種を育てることは、文化芸術による心豊かな市民生活の向上へのきっかけづくりになったと考えます。しかし入場料金が安価とは言えきれないことや、老若男女幅広い来場者を獲得する環境作りがされていたとは言えず、次年度以降工夫が必要であると思われま。</p>	<p>「花と音楽」をテーマとしており、宝塚のイメージに即した内容であると感じます。しかし、入場料および入場者数に課題があることから、今後はよりきずなづくりの趣旨に合致するよう、幅広い市民が参加可能な音楽コンサートとなることを期待します。</p>

No.	申込団体名	確定額 (円)	自己評価		評価	
			事業内容	効果	関係課意見	審査会意見
8	にしたによいしよ	500,000	<p>1. 西谷の景観PRイベント開催</p> <p>① 西谷地域の隠れた景観ポイントをめぐるウォーキングイベント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元住民お勤めの隠れた西谷地域の景観ポイントを紹介 ・開催時期: 8月26日、10月18日(雨天で中止) ・場所: 西谷地域 ・東部地区のやまもり山里 ・真言の道(西谷大原野地区の真言宗のお寺と里山の景観を紅葉とともに) ・参加人数: 5人 <p>② 音楽会の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8月26日に自然の家にて、森の音楽会を開催 ・地元の方や他地域の方と音楽を通して交流する機会となる ・参加人数: 約30人 <p>③ 「にしたによいしよ」の活動と西谷の景観(ごろく山里)の展示会開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ・西谷地域の景観のPRを目的とする ・春に訪れることが出来るようなスポット(ごろく山里)を紹介、展示方法を工夫し、見て触れて楽しめる展示に ・開催期間: 3月19日～3月29日 宝塚市役所市民ホール(市民ホールでの展示後、巡回展として夢プラザ、プラザこむでも展示) <p>④ 景観をテーマとした講演での展示</p> <p>3月17日の講演会場で展示(西谷の景観とよいしよのPR)</p> <p>2. 交流会の開催 西谷の景観の研究、さらなる南北交流の発展</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域内外の人と「テーマ」を設けて交流し、南北交流と西谷の活性化を図る ・西谷地域で宝塚市南部及び近隣市町村の団体と交流会を協同して実施し、参加者とともに西谷の景観について学び、交流を深める ・やまもり山里プロジェクトと協同 里山の植物、散策の交流会 ・武庫スケッチクラブと協同 西谷探索を通じての交流会 ・「花」グループとの定期的な交流を実施 農業体験を中心とした里山での交流(7月、10月、3月に開催、毎回20名近くの花グループの家族が参加) <p>3. 月刊誌「にしたによいしよ」の発刊</p> <ul style="list-style-type: none"> ・編集委員や渉外スタッフ全員が無償ボランティア活動員として、協力し合い毎月の月刊誌を仕上げる ・年間を通じて、各月のテーマを決め、常時取材を行い、翌月に向けて編集を行う ・活動場所は西谷地域全域、必要に応じて市街地でも活動する ・編集会議は月に数回編集員のみで行い、編集長が委員に記事の割り振りを行う ・月2回は、渉外スタッフを交えて会議を行い、印刷物が出来上がった際には全員で二つ折りや、挟み込み、配布などの作業を行う <p>4. 紙面だけでなくWeb媒体やメールリングリストを用いた情報発信</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎月の紙面をFacebookページ上などに掲載 ・メールリングリストにより、他団体などへの情報発信を行う 	<p>「にしたによいしよ」発行部数は現在5000部。配布状況は、北部西谷地域内においては住民全戸約、800部、地域内各施設340(7ヶ所)、他市の施設(猪名川道の駅)100部。</p> <p>宝塚南部においては、市役所の部所9ヶ所に230部、幼、小、中の50ヶ所に1500部、市内各施設(県民局を含む)24ヶ所に650部の他、旅館、レストラン(南北合わせて)120部、南北交流会等の参加者等に約500部を配布している。</p> <p>なお、南部の市民の有志が無償のボランティア活動で地区住民が引き受けて下さった方が1名100部、その他、スタッフの数名が南北間の交流で会合(趣味の会等)がある度に配布するのが300部、5000部の印刷物の2つ折りはボランティアスタッフの方々の自主的なご協力を得ている。西谷地域の方、南部地域の方、行政の方のご協力があった、ここまで活動することが出来た。</p> <p>西谷地域の課題として、地域の認知度の低さ(知られていない、場所や名称が分からない)があげられる。西谷地域の魅力としての景観や風景、イベント等など南部市街地地域だけでなく、西谷地域内においても知られていないことが多い。</p> <p>また、宝塚北サービスもオープンし、来訪者が増えることがきたされる。今後の西谷地域の発展に欠かせないことは知名度を上げる、情報を発信することであると思う。その点において、「にしたによいしよ」は景観を中心とした西谷地域の魅力を地域内外に発信することで地域の発展に寄与しているといえる。</p> <p>また、情報の発信だけに留まらず、交流会やイベント、展示会等を実施することで、南部地域の方と西谷地域、西谷地域内の交流や来訪の機会を創出している。紙面とともにそうした機会創出から、西谷地域に関係する人口の増加へと発展している。「にしたによいしよ」の活動を通じ、西谷地域で農業や地域活動をしたという方々が生まれたことも大きな効果であるといえる。</p> <p>継続的な活動により、「にしたによいしよ」を見て西谷を訪れたといった購読の感想などを頂くようになり、「にしたによいしよ」の購読者数が増加していると実感している。「にしたによいしよ」を見て初めて知ったなど、西谷の景観を主とした魅力の発信は西谷の訪問者数の増加や知名度の向上に寄与しているといえる。</p> <p>また、西谷地域内外からの本事業への参加者も増え、年齢層も老若男女問わず広がりが見える。編集員として、シニア層と若者、西谷地域住民と南部住民がともに活動を行い、西谷地域の景観資源を発掘することは、地域の文化や資源などの伝承や発展に繋がるといえる。</p> <p>このように南北交流の輪に広がりが見えてきたのが認識できる。南部だけでなく、近隣の人々たちが西谷に深く関わって行くことにより、西谷の人々の意識にも広がりが得られ、次世代に、広がりのある未来をというのが、本誌「にしたによいしよ」の目的として進めているだけの成果を得たと思う。</p>	<p>(都市計画課)</p> <p>「景観資源発掘」のテーマで2年間活動していただきました。西谷地域は豊かな自然と山並みに囲まれた田園環境が今も残っており、里山の風景を今なお感じることが出来る貴重な場所です。しかし、その魅力についての認知度は市内でもまだまだ低い状況ですので、この事業を通じて地元の方のみが知る西谷特有の魅力や景観スポットなどを、月刊誌やイベントを通じて、市内外の方々に発信していただくことで、自分の住むまちへの愛着を深め、自分達のまちを自分達の手で守って行こうという取り組みに繋がっていくことを期待していました。</p> <p>月刊誌は順調に配布部数を増やし、固定の読者も増加しているようです。今年度はイベントを中心に活動していただき、ウォーキングイベントの開催や、市民ホールでの春の西谷の景観PRイベントも積極的にを行い、市職員も知らなかった大原野東部の「ごろく山里」などの西谷の知られざる魅力を市内外の方へ発信していただきました。さらに、「ごろく山里」のPR活動は、市役所での展示終了後、引き続き、西谷ふれあい夢プラザ、ボランティアセンターを巡回し、多くの方に西谷の良さを発信していただき、こちらが期待していた以上の十分な成果が得られたと思います。</p>	<p>月刊誌「にしたによいしよ」も、ますます内容が充実するとともに、発行部数も伸ばし続けており、多大な努力をされていると感じます。また、地元の名所、自然環境、特産品を活かしたイベントも数多く開催することで、西谷地域の魅力を広めていることについても大いに評価します。今後は、自立に向けた工夫とともに、月刊誌「にしたによいしよ」刊行の継続と西谷地域のPRIにつながるバラエティに富んだ活動に期待します。</p>

No.	申込団体名	確定額 (円)	自己評価		評価	
			事業内容	効果	関係課意見	審査会意見
9	宝塚景観まちあるき会	300,000	<p>1. 準備作業……5月～6月 20人</p> <p>2. 調査・分析作業……2/月×10人×(7月～12月) 述べ約120人</p> <p>①景観・風景実査による景観分析を行う。主な視点場と特徴ある景観・風景。視点場と望ましくない景観・風景。固有性を有する建物、街並、歴史・文化資源、自然景観などの把握。</p> <p>②山麓からの眺望景観の分析を行う。主な視点場と眺望景観。視点場から主な景観ポイントの仰角、俯角測定と分析などを行い、全国の著名なビューポイントとの比較検討を行い宝塚南部市街地の景観特性を評価する。併せて、宝塚の特異景観スポットを把握調査し、幅広い市民にPRしていく素材とする。</p> <p>③地区計画指定地域を実査し地区ごとの特性、課題などを分析する。</p> <p>④調査・分析を踏まえて「宝塚景観まちあるきガイドマップ冊子」と「14地区別マップ」構成案検討。</p> <p>3. 編集、原稿作成作業……1月～2月 20人</p> <p>4. マップ印刷・発行……3月 30人</p> <p>5. 宝塚景観まちあるきフォーラム開催。……3月 基調講演と報告会。約120名参加。冊子等無償配布。宝塚の景観関連資料展示。にしたによりしょグループの活動概要展示。</p>	<p>①宝塚南部市街地の景観構造を調査分析することにより、宝塚特有の地形地勢を活用したまちづくりへの大きな目安を示すことができた。3D立体都市として斜面緑地の重要性、ほかの街と比較して都市景観が市民共有の財産であり保全の重要性及び閉鎖的景観の改善策の必要性などが明らかとなった。</p> <p>②主要景観軸、景観ポイント(視点場)、景観まちあるきコース、課題ポイントや課題景観軸など今後の景観まちづくりに向けた共通素材が提供できた。</p> <p>③面白い景観、ほっとする景観など宝塚には多様な景観が存在し、各ポイントを結び公共施設やサービス店舗、飲食店などをつなぐ多様な散策コースが展開できることがアピールできた。</p> <p>④市民が歌劇や手塚治虫など世界的ブランド力のある都市として認識するだけでなく、宝塚の景観特性と地形特性が作る環境や景観そのものが大きな財産であることを認識することにより今後さまざまなソフト、ハードのまちづくりに発展していくと期待される。</p>	<p>(都市計画課)</p> <p>宝塚の地形構造に着目し、宝塚の景観を「視点場」、「見上げる角度」、「見下ろす角度」、「見合う景観」などについて調査分析し、その結果をマップとしてまとめ、配布する取り組みを通じ、郷土愛を育み、宝塚市独自の素晴らしい景観を保全する取り組みに繋がることを期待していました。</p> <p>夏の暑い日も、初冬の寒い日も、市内の各地域に十数回足を運び、宝塚市の景観について市民独自の目線で様々な調査をされ、「宝塚らしい景観」を保全していこうという熱い思いが詰まった、「宝塚景観まちあるき冊子」を作成し、その調査結果の説明や報告を「景観フォーラム」を開催し、市内外の方々に発信していただきました。</p> <p>冊子では、山麓部からの眺望景観の分析、地区計画指定地域の地区ごとの特性・課題の分析などの細かな分析を行い、特に宝塚を代表する建物や風景の手書きの美しいイラスト、宝塚市の景観の特徴を掴んだ細やかな写真が掲載されており、配布した方々から大変好評を得ています。さらに景観、地区ごとの特性・課題の分析を通して、宝塚市が抱える景観上の課題の洗い出しや、市の景観特徴を実感できる多様な散策コースまで提案していただきました。</p> <p>今後も、宝塚市特有の景観をアピールしていただき、より良い景観の形成に寄与して頂きたいと思います。</p>	<p>宝塚市の景観を技術的・専門的な観点から探っていく独創的かつ新たな企画として、興味深く感じます。実際に、これらの調査・分析を冊子とマップにまとめられ、新たなアプローチから宝塚市の魅力を見出されたことを大いに評価します。今後も活動を通じて宝塚市のさらなる魅力をアピールしていかれることを期待します。</p>

No.	申込団体名	確定額 (円)	自己評価		評価	
			事業内容	効果	関係課意見	審査会意見
10	逆瀬台小学校区まちづくり協議会	271,000	<p>8月 実行委員の組織化→逆瀬台小学校区まちづくり協議会で承認 8月 実行委員会キックオフ会議開催 8月 4公園を選出し、アドプト制度申込(逆瀬台1丁目公園、逆瀬台1丁目第2公園、逆瀬台2丁目公園、光が丘公園) 8月18日 公園リノベーション事業申請 9月25日 公園リノベーション事業のプレゼンテーション審査と結果 9月18日 マップの内容とデザイン打ち合わせ→出来るだけ手作りを目指す 10月 本事業を「ゆずり葉だより第89号」に掲載 10月 逆瀬台小学校区まちづくり協議会役員会で説明 10月 実行委員会を開催 ①公園整備等、PRをロードマップに反映する方法を決定。またデザインを決定(皆で考える。手作りのロードマップを目指す) ②お披露目イベントに向けて、専門家講師を呼んで打ち合わせ開催 ③マップの発注業者を早急に絞り込む 10月 各自治会からPRLしたい箇所と内容を募集→マップの参考にしたい 11月 マップ作成は「(有)クルーズ」、イベントは「FM宝塚 清水氏」(打合せ5回) 12月 12月度ゆずり葉コミュニティ会議にて報告 平成30年 1月 ロードマップデザイン案作成 2月 ロードマップ初版完成→内容精査→校正(打合せ計5回)。3月5日完成→印刷 3月 3月にマップ完成イベント打合せ、準備、計3回 4月8日 3月にロードマップが完成し、すっかり春めいて花壇も花の芽が出た時点で、お披露目イベント開催(ロードマップを活用したウォークラリー、ゆずり葉公園にて風揚げ等イベント開催)。各自治会から多くの参加者が来られ、ウォークラリーと各自風揚げ作りと40連の風揚げを楽しみました。(宝塚市からも4名の方が参加) 4月 本事業を起点として、今後も皆で憩える公園づくりをし、花と自然でいっばいの魅力ある逆瀬台のまちづくりとロードマップを活用した健康づくりを継続し、エイジフレンドリーシティを目指していきたいと考えています。</p>	<p>(1) 近所の公園の活用策を考えるに当たり、花壇づくりの活動ノウハウの取得を行うことで、地域の人的資源の豊富さを体感することができました。 (2) 公園や裏山の活用策を地域住民で考えるという協働作業を行うことで一体感が醸成されるとともに、住み慣れた地域を見直すきっかけとなり地域創生への関心が高まりました。 (3) 魅力ある『公園活用方法』が具体化し、『ロードマップ』ができ、子どもから高齢者まで世代に応じて、自分の興味や体力に合った公園・裏山巡りのコースを自分で企画し「健康づくり」に寄与しています。 (4) 今後、公園が地域の「居場所」となり、住民同士の「見守り」や助け合い意識の芽生えができ、災害時の一時避難場所としての公園活用など「防災」意識も高まりつつあります。 (5) 本取組を通して、住民が身近な公園で花壇づくりや運動などを定期的に行いはじめ、活動場所である公園の草引きなどの日常の手入れを行うことで、今年4月から公園河川課のアドプト制度の助成金を得はじめており、行政は公園の維持管理経費を抑制できています。 (6) この取組は、公園をキーワードに地域の連帯感を醸成するものですが、ロードマップが地域の周遊の『つなぎ役』となり、地域の多様なヒトの垣根をなくし、連携強化につながるものと考えており、今後の本市におけるエイジフレンドリーシティの取組のモデルケースとしての役割を果たすものと期待しています。</p>	<p>(地域福祉課) 地域に点在する公園は、子どもたちの遊び場だけでなく、公園アドプト制度などにより、清掃や花壇の手入れなどのつどいの場や見守りの場にもなります。この事業では、そういった公園の機能を強化し、地域づくりの中心になるような取り組みが実施されました。 地域の公園や裏山のハイキングコース等の地域の資源を地図におとし、「ロードマップ」を完成し、まち歩きイベントとして地域の高齢者から子どもたちが参加し、世代間の交流も図られていました。 今後もマップを活用し、継続的に地域がつながる取り組みを期待します。</p>	<p>地元の「公園」を核として、居場所、つながりづくりの場として設定し、老若男女が地域に愛着を持てる手段としての企画であったことを評価します。この成果を様々な機会を通じて他の地区にも発信することを期待します。また、今後はマップのさらなる活用と工夫によって、継続的な事業となるよう努めてください。</p>

No.	申込団体名	確定額 (円)	自己評価		評価	
			事業内容	効果	関係課意見	審査会意見
11	宝塚広域ボランティア連絡委員会	455,000	<p>1. 聴覚障害者を交えた避難所運営訓練の実施 【実施時期／場所】10月21日／ぶらざこむ1 【内容】聴覚障害者グループの皆さんと、防災・減災への取り組みを実践されている幾つかの地域の協力を得て、協働による避難所運営訓練を実施。聴覚障害者グループの参加者にも、支援されるだけの立場ではなく、役割を分担して行動してもらった。仏教大 学後藤至功先生の指導による。 本訓練内容をビデオ、写真等により記録し、12月開催のシンポジウムにて活用。 【参加人員】約100人</p> <p>2. 第4回 ご近所の底力 防災・減災取り組み展 【実施時期／場所】11月30日～12月10日／ぶらざこむ1。1月10日～14日／アピア1 【展示内容】i. 市内自主防災会、まちづくり協議会ほか防災・減災に取り組む団体の活動紹介。 ii. 災害情報の収集方法。 iii. 熊本地震と障害者。 【参加人員】約200人</p>	<p>10月21日の避難所運営訓練は16名の聴覚障害者を含む70名余りの地域住民の参加を得て実施しました。参加した市民の多くは聴覚障害者と出会ったり、一緒に作業するための意思疎通をはかる経験がなく戸惑いや混乱が生じました。「書いて伝える」ことに精一杯で「伝わった」ことの確認に至らなかったり、聴覚障害者からの申し出がないと作業の目的が確認されなかったりと「聴覚障害者と考える」と題した訓練と言えないのではないかと当事者からの厳しいご意見も戴きました。このことは、いかに平時において聴覚障害者と健聴者が触れ合い分かれ合おうとできる機会が少ないかということを表しています。 一方では訓練の進行と共にお互いの理解が少しずつ進み、ホワイトボードの活用や、何とか伝えようとする市民同士の協力があったことも事実で「身振りでも伝える」ことなどを実感できたことは、今後のお互いの理解につながる機会になったと評価しています。 また、訓練に先立って訓練当日の進め方について当事者の方と共に考え、検討する機会を持ったことは有意義であったと評価しています。 本訓練の話題提供によって、当事者同士のコミュニケーションや相互理解の必要性、他団体との協力の有用性や必要性を感じていただくことへの一助になったと考えています。他の参加者にとっては当事者を交えた検討会での経験は資料の作り方、進め方に必要な配慮を知る機会となり今後の参考になったと思います。 訓練実施後、11月25日に開催された宝塚第一小学校での「総合防災訓練」では宝塚ろうあ協会が手話での交流ブースを担当、宝塚中途難聴者の会のメンバーも訓練に参加したりといった場作りにつながっており、今後も市内各地域で当事者の皆さんの参加の機会が得られるようサポートしていくことも我々に課せられた課題であると考えられました。 12月2日に開催したシンポジウムでは10月21日の「聴覚障害者の皆さんと考える避難所運営訓練」を受けて、当日の参加者から、宝塚ろうあ協会志方龍さん、宝塚中途難聴者の会大村陽一さん、宝塚市民生児童委員連合会神谷宏さんにパネリストとして登壇頂き、コーディネーターとして、ひょうごセルヘルグループ支援センター中田智恵海先生からご意見を戴きました。</p> <p>◇交流会「みんなの声を聴いてみよう」 参加グループの感想 ・「防災」という共通のテーマで当事者、地域、行政、民生委員など様々な立場の人と交流が出来てとても有効な機会だった。 ・新しい繋がりが持てた(行政・マスコミ・地域リーダーなど) ・宝塚市の備蓄食品にもアレルギー対策が進んでいることが知れて良かった。 ・発信していく大切さを改めて感じた。 ・このような機会は継続していくことが大切</p>	<p>(総合防災課) 聴覚障害者を交えた避難所運営訓練では、当事者と地域の方が直接交流を行うことが出来た。避難所運営については課題を残しているが、訓練後も地域の防災訓練に障害者団体が参加するなど、本訓練が地域の方と障害者の方を繋ぐきっかけとなった。 また、訓練後もシンポジウムや交流会を行うことにより、両者の理解や意識が向上し、課題の共有も行った。 防災・減災取り組み展では、防災啓発や災害時の行動などの情報だけでなく、市内各団体の防災活動の紹介も行うことにより、防災をより身近に確認できる機会となった。 ワンコインチャリティコンサートでは、民間事業者も協働し、音楽を楽しみつつ被災地支援を行い、防災について考えて頂く良い機会となった。 様々な活動により、地域防災力や障害者の方々への意識の向上に寄与できたと評価できる。</p>	<p>「防災・減災」について非常に意識の高い地域団体のもとで、綿密な企画と準備を行い、多くの参加者に意識啓発をされていることを大いに評価します。また、事業を通じて、様々な当事者がいることへの気づきが生まれ、当事者とともに考える必要性、日常の場面での相互理解の積み上げの必要性を導き出された成果は非常に大きいと考えます。引き続き、宝塚市の地域団体の防災・減災のロールモデルとして、他の地域団体にも拡大するように担当課と連携して取り組まれることを期待します。</p>

No.	申込団体名	確定額 (円)	自己評価		評価	
			事業内容	効果	関係課意見	審査会意見
			<p>3. 災害時要援護者と市民のためのシンポジウム及び交流会 ① シンポジウム「私たちから見た災害～その時聴覚障がい者は～」 10月に実施した聴覚障害者を交えた避難所運営訓練の報告 ②交流会「みんなの声を聴いてみよう」 聴覚障がい者に限らず、他のセルフヘルプグループも交え、市民との交流の場を設け、災害への備えを共に考えた。仏教大学後藤至功先生、ひょうごセルフヘルプ支援センター 代表 中田智恵海氏の指導による。 【実施時期／場所】12月2日／ぶらざこむ1 【参加人員】約120人</p> <p>4. 防災・減災を話題にできる懇談会『えらいこっちゃ！でもだいじょうぶ』キャラバンの実施 【実施時期／場所】平成29年11月～平成30年2月 【内容】日常、普段の暮らしに「防災・減災」の意識を促す懇談会、話題提供活動 【参加人員】約20人</p> <p>5. ワンコインチャリティコンサート 【実施時期／場所】平成30年2月25日／ぶらざこむ1 【内容】東日本大震災及び熊本地震への支援を目的としたコンサート。 ・「私からのメッセージ」として コープこうべによる被災地支援活動の報告及び宮城県本吉郡南三陸町歌津中学校 元校長 阿部友昭氏 による防災講演会を実施 ・和太鼓集団「熱光」によるコンサート ※この事業の参加費は各地の被災地の支援金として活用させていただきました。 【参加人員】約150人</p> <p>以上の他に宝塚市社協ボランティア活動センターが実施する「災害ボランティアセンター運営訓練」に参加。この訓練にも、聴覚障害者グループからの参加もあった。</p>	<p>参加者の感想 ・トイレ、更衣室など「男」と「女」だけではなく「どなたでも」という配慮が必要だということを知った。 ・外見では分からない困難への気づきや配慮は難しいが、正しく知っていく気持ちとその機会をもつことが大切。当事者を交えた地域での小さな集まりからで良いと知った。 ・カミングアウトをためらう当事者の方も多いが、住民同志の信頼関係があってこそ、あるがままの自分を表現できる、日頃からの積み重ねが大切。 ・在宅避難が必要な場合でも、行政や地域との連携が出来るための工夫が必要である。 ・立場の弱い人と共に考えていくことで、地域が丁寧に繋がっていくことが出来る。 ・当事者の「知ってほしい」「知られるとどうなる？」という悩ましいジレンマに触れることが出来た。 「災害時」をテーマとしたものの、話題は災害対策だけではなく、障害があってもなくてもお互いが分かり合える社会の実現のためのヒントに満ちた集まりとなりました。</p> <p>後藤先生まとめ 当事者、市民、行政、中間支援組織の4者がフラットな立場で集まり、話題を共有出来たことは初めてではないか？今後も同じような集まりが各地域で実践され、当事者性が認知、理解されることで、避難所での具体的な対策が盛り込まれることが望ましい。 中田先生まとめ 4者が揃って「災害」をテーマに交流ができたのは夢の様。今後もセルフヘルプグループ同志が連携していくことができるような仕組みを検討して欲しい。</p>		